

巻頭言

Guest editor 寺井 崇二*

肝硬変は、肝臓における慢性炎症が持続することにより肝線維化が進行し、血管系およびリンパ管系に変化をきたす疾患である。そして肝臓が硬化することで門脈圧が上昇し、末梢血管の拡張を伴う複雑な病態を呈する。

近年では、生活習慣の変化や高齢化に伴い肝硬変の原因も大きく変化し、従来のウイルス性肝炎に加え、アルコール性や脂肪性の肝疾患が主因として増加している。このような背景から肝硬変の診療においても、非代償期への進行を見据えた全身的な視点での対応がますます求められている。

日本では、肝硬変症例に対して身体障害者手帳が交付される制度があるが、これもまた、疾患の予後予測に基づいて制度設計がなされてきた経緯がある。さらに、急激な病態変化を示す肝疾患である ACLF(急性慢性肝不全)への理解も、診療のうえで不可欠となる。

一方で、肝硬変の診断・治療においては最新の科学技術を活用することが重要であり、本特集では肝硬変の病態生理をはじめ、血中線維化マーカー、新しい超音波技術、MRI を用いた画像診断、肝硬度測定、さらには AI の臨床応用など最新の知見が紹介されている。

海外では、食道胃静脈瘤の発症予測において Baveno 基準が注目されており、肝静脈圧較差(HVPG)の測定がその意義を増している。日本においては内視鏡による静脈瘤の診断が一般的であるが、門脈圧亢進症の病態理解とその管理においては HVPG 測定の有用性は高く、今後より簡便かつ広範に実施可能な測定法の開発が期待されている。

本特集は各分野を代表する第一線の先生方にご執筆いただき、現時点における肝硬変の病態と診断に関する最新の知見を俯瞰できる内容となっている。本特集を通じて、肝硬変に対する理解が一層深まり、明日からの臨床診療に活かされることを願ってやまない。

Shuji Teraï

*新潟大学大学院消化器内科学分野(〒951-8510 新潟市中央区旭町通1番町757番地)